

後

二四	二	三三五〇	和書門
冊	架	函號	類

御觸書

天明集成

四十九

八〇	三三五〇	和書
架	冊號	類



共廿三

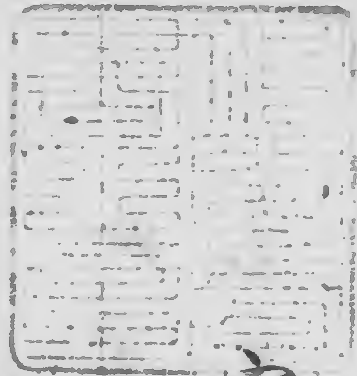
内閣文庫	
番號	和 32850
冊數	21 (22)
函號	180 41

- 一 公事訴訟并借令根買裁木之部
- 一 牛馬車木之部
- 一 花火之部
- 一 湯尋者并加しり車木之部
- 一 博奕之部

Faint, illegible handwritten text on two pages of a document, possibly bleed-through from the reverse side.

公事許証并借令張買棧本館

寶曆十二年八月



武家事務社
凡此令張買棧

所存所不におわてハ海方不中付ハ此
以度於大坂所人たより為差出ハ
金子退之町之代買棧を所より

洋借金と名目を附いて是に成る
貸付の若くは武家と社とも命を
其のほ名お對次才貸附の板中渡
此舟若返海お滞所出の席八右
令浪お入斗浪武家諸社を大坂
町奉行所は出海方中舟の板
お是の旨を公的お是の

又月

寶曆十四申年八月

評定不一座に

大坂町奉行所同小札後園久留米
切手米荒か出入裁評に後浪之
長右衛門九三並小禮文之浪子返問
切月迄小之勝手次第才茂之荒か小

振との文之も之に榮祥仕入根
内にお渡の根子に付切月を極利根に
相對茂あり榮祥に賣代根を以
て致返海名に係院文の上を令
根子に覺いたためを榮祥切にお渡並に
之紛お聞新切に引替に後年
及償便のの儀義中にとる長右門

不念に致方の以治志切に方を
取用義お中身に以助に之に之
義お中身に以建義に之に通用
切に之に係筋之に以切に之に
不及沙汰備令に方は身に九斗の極
お達し

八月

明和元年六月

之身行也

論所之事國境邪境之義双方互合
鑑界之清國鑑界大概お遠之云々
おわてハ及及換使裁許て之云々
入組不中後之様格使先卷中ら及事々

測量書之有之田畑山林出入之件
地政測量係も右に准可中候ニ以テ交
近年地政測量係別ニ多有之概ニ
お少シモ然レモ書付ニテ難お分ル
至被地政測量係ノ事ニモ其ノ均等
格別ノ注意無之モ能授ホク候事
如何概ノ裁許請出テ双方中分

其ノ趣中少シノ數モ有之モ右稱ノ
係採ニモ先斗方決才ニテ地政ニ係
不及右測測量係一有之田畑山林
出入ノ後若シモ地政測量係ハモ
其お分ノ事ノ概ニお少シノ訴訟ニお分
妻お分ノ結果未中分お分お分
果も有之モ其ノ結果お分お分

新下波小筋もてあるは公事合お成りの
訴訟方紀重の上にお手方歩合
お札の強の中年も波の方及は
巧とい中お札類を以中募は後
お成の方及は田畑山林にお金の中
一通の吟味のさるる危う地政
差是の根成行はるる如何の

右の趣を以て中より地政を差是
お波の儀も下有るは

但地不境の事言は論はたよひ
理よるに働はるは右訴出の節
地不境の儀より事記述地政
をさる上るは論はるは吟味
如何の先口論理よるに吟味

昭和二年正月

之条

高野聖方大徳院

佛宮 佛靈屋正修復料大徳院方

貸付山形正修復料令之右借之

波右對借請山老之名承令之右社

奉行に為書お着込令滞り
取出し紙中渡重取出し通例
借令取扱より勤弁了了所方
中身比答比答為公得お進出

正月

明和二年十一月

搜授句當に所府政令友令に申
申立高利に世上に貸出返令滞
比所老府政令大物に在る武家方ハ
玄関ホはお諾否在高声に難云
申或各所法切張在彼是我修成

辨言被債後小幾有之由相中ノハ
勿歸借令債後ノ後之時 臣ニ寄
借手次第ノ事ニ由テ右ノ被方ハ
借之旨私辱とあり一由返令被さす
此根ニ任ル事ニ由テハ債後ノ効ニ由ル
無ク由右ノ通ニ分クニ高利ニ由
元引仕ル所ノ事ニ由テも庶民ノ

令子親重為貸カハ若多有ク趣ニ
お少由過分ノ高利又ハ法外ノ
債後被小債ノ身在行不味ニお成
替中後モ有ク由テ是角不お止
之上借之旨ノ事ニ由テハ
返令お滞ル節ニ法外ノ債後
可被令説文認サセ元重且又利令

之儀説文之志通例之利令之為徳
実之利之元引仕之亦之儀
礼令之名附用之令子之内之白
引元之儀を有之右を聞不持之
至之由以來之方之高利之實之儀
我分爰之勿偏儀令儀後之儀を
儀之決才之事之由得之玄関之亦

儀後之者無儀分爰場不之亦諾
難之亦中法外之儀い之之由儀
仕分爰之若お肯之之吟味之上
急度之申之由

但度取之亦持之令子ハ官令之
仕之亦不之は實之由儀ハ之
事之由得之他之者之令子也

紙り重自今令子之由中貸出
此後ハ仕分爰候由分以來右所候
仕分爰由

右ノ趣所申テ簡知由也

右ノ通所奉行よりお簡由分向く寄
て注おを連由

十二月

明治廿五年七月

之身行由

大坂表貸令根書入此斗方之候
以來ハ当地之由貸令根九斗方之趣
借用之由不拍三十日限由方中渡
右日限不お由候由之由之趣切令由

中身を先訴後訴に差別なく
裁くも右に通り元斗の右に
委細之儀ハ何儀に承公根お達
此分て此節に意也

七月

安永之年年七月

大坂所奉行不におわて令根お入
元勘一方之儀双方を橋河泉橋
四ヶ國之者より大坂所奉行不
取捌余國に是にお入ハ吉社奉行
又も此勘定奉行に添答を以差出

且大坂并持河泉措令根お入
江戸表丸捌之返切令申付根
九年以前戊午八年以前亥年
相違小交之先後借用令責裁令
之款納之返海方行由急是令根
先引手挟成通用不更由依之
大坂并持河泉措之令根お入元斗八

勿端之役申國に由兩國之者
よても令根お入之役お为てハ
享保年中小條安房守大坂所奉行
勤役之席伺お海小通以來元斗八根
大坂所奉行に之申渡小

七月

右之通大坂山城代に申渡小分と名

可也其心乃也

安永四年二月

三車引也

年貢米賣拂比釣誤る亦令落元
右米江戸廻いこし令之は木取渡
外之は賣拂令之波難儀小由之
凡聞有之瓦沙治言已六てあり小由也

万一人之存と公の遠右所之茂
元斗及赤坂殿比河ハ是之家来
比仕立之お成家老之弁辛立ハ
家来名勿端之人迄も不意難道
小桑之家ハお力て存之ハ家来上
柴中舟並右所名来之儀之振
一渡ハ

二月

右ノ通お觸比等之儀之意ハ

安永六年十月

大目守に

奥向之西之舟以役人は祈訟人
頼人亦之儀頼て分及事之極
との候ハ兼くより公均有之事外は
若瓦振之儀有之候也又老申

近年奇之非比役人之家来ホリ
教人ホリ事ニ付与教分方及候ル
老申又ハ支配之無遠ニ思テ
右ノ趣ニお達台湯沙治も有リ付
中是山以候テ
右ノ趣ニお達山ノ人ノ遠
有リ振ニる名如ハ何ニ分
亦お達山系

之候テ
通山

十一月

安永七戌年十月

近來盲人并浪人甚多利令貸出
不法成債債未較此經書聞不屆二舟
今般於舟行不右舟之族吟味
中舟以就變者祈之令報貸債是
乳有之此根也公得貸債是支此也

世上及雜役山主の可なり公
為辨之令根貸借名勝手次第
右對差支之根之渡山
右之越公の遠之根之公簡山

十月

天明元七年閏九月

三年八月

借令根返令お滞令之及公訴
奉行不より裁許中渡山上右
裁許之通にお苦之知近來切令
負教甚不足之危書又右武士方

予合以家来并与社在所方借方之
之の口年行の先紙是の言も其
評定下口家来不先お後も有之由
不情之趣お聞以点今まで切令
負殺未之候も甚寛成中舟方以知
右裁評之趣不お用程不情之元斗
有之写爰事一以知素不情之事以得

先只今之迄之候も不及此所傳以
向後志年行不之る歳爰元扱之上も
不情之輩有之候も武士方以年行
老申以中是道苦之候も其席可遊
吟味以糸以来急度之お心得以是
与社在所方是年行不之る急度答
一申年以

右ノ通寶一曆九年相解小交又々
色以切令負殺甚不足三差也小茂
有之由不坊之申二小孫先至也相解
小題急度之申小得小於後不坊
之候也有之申二申三不坊
元扱小管之申小以來元斗小家來也
公得遠之候之人之申二急度之

中身小是也社并在所同根之事也
右ノ通一之相解小是元斗一方之候
書西ノ通一之相解小

同大月

天明六年六月

近年令根融通不便。該家若支
有之。越前山分以度令根融通。若
友之。海書令社。信書山。

德國

寺社山伏

宮門の方尼御下を御除く余之分
本寺本山より重之山社徳家より元洞
を来くく懸随ひ上く分を不
令松女あり定を以下にお應いお令言
本寺本山并重之山社家よりお極
朱与觸下支配木上中渡山

徳園

湯料

私領

百姓

持言石石身根式拾之文宛

但於大坂表に度湯用令と危お山
よりのお除山積

右同形
町人

向口を以て舟地より根之文宛

但於大坂表に度清用令差おひ
そのハお除ひ積

右を當年より米成迄又今年に
年々米書に通か令根に 何年迄

公儀茂比令に差加一因大坂表
會所にてわて利足七米に積を以
流家比代貸附いし一返渡引為に
後ハ大坂表通用米切手并銀分の内
お意に村言流文に書入万一本滞の
最末米切手ハ彼地定法に通れ斗
切手米為お渡村言ハ宛寄比代友に

取りて物成を以て返洲に積勿論右
出令根く分比用お洲取才出令根
いこし比者とも比度以下利是る
七朱く内會不法入用く分引く
そ余く利是右元令根比度以下
比席是又お令根いこし比者比
以下比司公得違之く前書く通

出令根一茂比是右お令根納方
之候法國をち社公法を積く
お令根高本ら本山を元極中渡上
田教亦口く内百姓所人へ前書中渡
趣相違次才是又口教番之内
出令根いこし来未年より八年く
一月申く積お心得出令根く分

沙料志之祈之東河也代官并
以領不私飲之飲之地取^口差出吏有
江戸家寄志江戸駿河所為智田用是
之并組并同不上田組武之不^口内^口
早^口お納入坂寛奇志彼地^口并組^口
高^口蘇麻橋^口之町目上田組^口上申^口河
右武之不^口内^口お納^口

右^口通^口万石^口以上^口以下^口其^口飲^口分^口和^口河
左^口方^口所^口方^口不^口淺^口板^口一^口中^口渡^口各^口之^口お^口納^口

六月

天明六年八月

此勘定奉行也

先達之令根融通之寺如法園湯料

私領寺社山伏百姓所入分書令也

印付後

公儀 茂也令之先加於大坂表法家也

此代實附之積お是は均た以度関东筋
を介お水る向く難儀之趣もお申す
依にお令之後一統也危心
仰お此を候向くは之は相觸也

八月

牛馬車亦く部

寶曆十三年四月

牛車大八車地車并若物と海の
馬車通の儀往來之際、不_レ成_レ根
筋_一茂_レ度_一お觸_レ交_レ根_一お成_レ馬
車と_レ車_一續_レ刻_一子_一牛_一を_レ口_一と_レ放
返_レの_一往_レ來_一の_一人_一も_レ除_レ不_レ中_一我_一成_レ成

辨にお聞不届の自今車引馬子を
往來家信仕様我人未も於有くと
急度で中身名先年相解の外交
近頃又々かろつてお成の上此用之礼と
建立通の節若別にかろつて往來せ
不お接我信成辨の名お申不届の
以来急度お告知の無様で波の

若お背のり急度で中身の

但此用清原のよの成右之趣
相公の急度で中身の勿論右札
お渡の外没不よりそ節の中渡
為之の若この分を右でおんじ

右之通所申はお解の振所身引は
中渡の外分西の家来下く本にも添急度

て中身右玄元寅年お觸小交近次又、
かゝるにお成往來之障にお成由お中身
以来急度お中根下改台程又町中
お觸小根所身中中渡法家小行法馬成
近來別にかゝるにお成往來之一向除余
又仕之上長端鑑いししる教多事續
之介乃幅狭所は程系之重往來之障

お成小右お聞如何成事之以来右所之
之之往來之障にお成根行身事通
小根急度て中身小以以後何成後也
有く小之之人て為不急也

四月

Handwritten text on the right page, appearing as bleed-through from the reverse side. The text is vertically oriented and includes several lines of characters, likely in Japanese or Chinese.

Handwritten text on the left page, appearing as bleed-through from the reverse side. The text is vertically oriented and includes several lines of characters, likely in Japanese or Chinese.

花火之部

寶曆十辰年七月

花火之儀亦く甚 仁敷の趣も有く
小変ノ子孫ヶ谷迄ニハ花火たて小振ニ
お少の由語稍苑近所ニハ別ニ
左振ニモ有く又事ニハ向後
右ノ通ニ儀有く小ノ急度由吟味

一有く名先年茂お筋の添右に通
よて花火たての儀望て為る用也
右に通て相筋也

七月

明治七年六月

前く茂お逢ひ花火の儀添右通
近不を介するも家込の場所
花火の儀せいふ立の儀望て為る用也
右に通て相筋也

六月

安永二己年六月

茶ノ茂お達山花火ノ後弥山曲梅
道下を介するも家込ノ場下なる
アノせいホ之ハ後告ニ為ニ用ハ
右ノ通可ニお解ハ

六月

安永二年七月

花火の後先達之度にお解小泊共
又く此曲拂近不家込場不る花火
P...せいふ之山越風少もあゝ如何成
後山以来急度一為不用小
右へ遊てはお解小

七月

安永八亥年六月

苑火之儀先達之度、お觸の波を
又、湯曲掃込不家込の場不
苑火にうせい木立の趣風沙も有
如何成儀、以来急度、為不用名
玄元年年お觸の跡右の趣、おん場

若以以後怪火見請此り早速
火消役共職る可有る此を以成
後有る此り火消役今同身は
お逢ひ此り分る名て相公此り
右へ通てお解此

又月

安永九子年七月

此目身は

花火之後先在る度にお解此
此曲掃込不家込の場所とる若
花火了うせい未之此後とる
お解此若以以後怪火見請此

此紙是如所成後也有く此の由目付に
お逢ひ振先を逢うお逢ひ遊言ん得
着由曲禱迫不る花火了うせい
立此の由見由每人教不是者
祝う候るも何方く過る花火
立此の中候又若誰屋敷にお分り
花火く多少のうも是度は由目付に

お逢ひ遊言ん得

七月

右の通火消役はお逢ひ遊言ん得

Faint, illegible text on the left page of an open book. The text is mirrored across the gutter.

Faint, illegible text on the right page of an open book. The text is mirrored across the gutter.

清尋者并かたり事ホレ部

寶曆十辰年六月

尚辰四月十日元之人淺草い石

三布名清店与布名東とささる

実教迹云い表云東人相書

一年之十に大衆にお見い

一生國大坂大海の船より者く由

- 一 せい申せいふどり肉
- 一 面旂鼻の筋通鼻の先赤く色はく
さうれいなをせし
- 一 鬚ハ中鬚月代并髪毛を厚さ方
- 一 髪を短くせし
- 一 眼並より大さ成方
- 一 眉毛厚さ方

- 一 舌古く少支の氣味有し
- 一 衣類木綿の納戸茶洗の根なす
裕を惹く帯ハ不お知し
- 右に通くもの於有くハそ不の留意
- 湯料名は代官私飲ハ飲之地既ハ
- 中か支より於江戶依田和泉書書不ハ
- て中か右人お書く者及見及つし

之候中おれを家来又者未と念て遂
吟味お着隠重服におれおりて為
曲事一々

又月

寶曆十一年六月

玄辰四月十日元之人淺草山之宿所
之市玄米店今市玄米と實殺迹云々
表玄清人お書と以同年六月お觸おれ
今以及出お先達とお觸お人お書と通
之者有之おれお油所お政と下は

田重依田豊之前中書不口下お在也

又月

右ノ通テお解也

寶曆十二年十一月

尚平十一月十二日南茅場所

嘉平治店所醫者後田之店

妻み祢を横刻して顔の内

不之深子為負迎也也石仕

長助人相書

- 一年式格に業を年米程にお見ゆ
- 一生國紙後國蒲糸部村名不お名百姓
- 仁八と申者く將
- 一申せいふり肉
- 一色白くきれい成生得面解みうじ
- お見ゆ
- 一月代いり方

- 一 目細方より一重まふち黒目かちり
- 有く眼申小うじお見ゆ
- 一 髪厚く髪多き方
- 一 眉毛耳唇者所鼻筋通止歯
- 細なる方
- 一 首筋よく詰り方
- 一 舌舌な端で水得た江戸割水根

有之一种物之静なる方

一衣類之色洗ふけの布子紋取ハ

不お知并古淺黄木綿袷志由人

一 总古黒木綿帯波張在ハ

右之通之者於有之と之所 留重

沓料志由代宿 松殿ハ候之地次ハ

中お更より於江戸依回冬前与昔所ハ

一 中おハ右人相書之者及見及聞ハハ

一 之候一ハ中おハ在象来又老木と入念

一 一 遂以味ハ若隠重振よりお知ハハ

一 一 一 為世中事ハ

十一月

寶曆十三年十二月

玄年十一月十二日南茅場町嘉平次店
所醫者友田之庵毒上所之源
為貞迹玄小之庵石仕長助人お書
上以同月お觸小交今以不出小
先途二お觸小人お書之通之其の

有之由之跡江油所相改之所
尚量依田冬米与多不口一お是也

十二月

右之通之江お解也

明和乙子年二月

玄亥乙月十日武列兎玉那新里村
よて貴父漱丸朱門口手疵亦已せ
逐去山同村源次市次男半次市
人相書

一年武松七某年米お慈三お見也

一生國武品兒玉乃新里村百姓
源次席次男

一 申せい瘦肉

一 面解長鼻之鼻筋通疤瘻之
少く多くは乃た不目之案相お見
色黒き方

一 唇常解齒細二揃ひ

一 目之之まふち白眼晴成方

一 肩毛厚き方

一 首筋延ひ方

一 耳帯解

一 衣類由納戸糸木綿布子裏是致

一 不在二打貫考色木綿袴裏之念き
こくさ色木綿袴物と念一帯念

花の色を織幅廣さの方

十根元長き三尺八寸菊花塗鯨白柄

糸菜を染うと二重切羽浪させ目貫

挿板木を縁赤洞政角端淡丸挿板

木をすくうけ緒花の色

右に通くとの旅をくはさす下を重

湯料を代友私飯ハ飯之地頭の中

夫より旅江戸安後深山少粥の方には可

中お小若及見及少くも候も可

中お小を家来又者未と入急可也

吟味小隠重服におおひつて為事以上

二月

昭和二十五年十月

比勅定奉行に

武列船賀船之内村には近年浪人
群之其の系合力と乞祈りたる後
中其の教多有く此右群之其の
百捕りて其之請之請用新用ハ組合

高割に被度名おれ外村方有くははれ
右敷く後志頼おれ村くははれ限中
可安事申ははれ部ははれ補うりたは安後
中は根藉又ははれ由志有くははれ
百捕申ははれ公事方は勘定申は月書は
百連て出ははれ用難用ははれ申は後
公後てははれ下ははれ若ははれ分は被度他ははれ

先口或れ出ははれ有くははれ申は
百捕申ははれははれ色組合村くははれ度可
申ははれ也

十一月

右は海國八列并保夏國村くははれ
相筋は私領く村方、ははれ宛考は代友は
不渡根通ははれ根てははれ

明和六世年六月

近年浪人杯と中村と百姓家は糸
合力を乞ふ少く合力減るとは
山崎も無口いこゝ或一宿と乞泊
病氣杯と中村と又口義波逗留山内
品々難儀と中村合力減銀計

祢之甲元石後粗お少末届く至小
一 以来右旗之者其銭比々々色之
裸多非人之為石捕亦之公事方
此勘定奉行は江色を渡屋一勿辨
何帳の中は其変る心宿探ささせ
苗字帯口いこ一外とのは一淺之
公力も渡屋一々小着お背比々下

為曲事也

右之越相守筋書元村をの是并
村役人其之居宅前探之張並て中比
右之通関八列并伊豆國甲斐國村之に
てはお筋比私殿之村一方比を完奇
一 此代友介不渡帳通比帳ては渡比

明和六世年十二月

當正十月十日神田令沃所跡を東店
後八妻加川を切殺迹を石住長助
人相書

一 年斗拾日某年某ふけの方にお見
一 生國が羽國秋田仙小郡換子内町に者

- 一 せい高申肉
- 一 顔色白くおめたる成方鼻筋通
眼よりこくおえぬ方
- 一 唇赤く帯解齒並能細うたる方
- 一 眉毛濃満ちり上りぬ方
- 一 月代濃額大く妙記あけぬ方
- 一 左腕肘際二寸程切疵愈ぬ跡

ありぬ

- 一 言葉鼻かて分り兼ねぬ方
- 一 衣類花色洗はけぬ布子紋所
不おぬ花色木綿申形小紋單物
恙同前貧乏帯いりし法在ぬ
- 一 右へ通く者於有く志を不に備量
湯料ハ四代友私飲を飲之地段に

中出丈より旅江戸牧野人遇て書新
可中か右人相書之者及見守り
之後中か右人相書之者及見守り
急之を吟味し為深重恨合お知り
下る曲事也

十二月

昭和七年四月

去年人相書と云お逢し神田合沃所
弥多清店茂八妻と切殺逆云石住
長助事旅羽別秋田飲百捕也
未及お尋し百を候向くはお解也以上

四月

明和七寅年六月

裁中國村水部言是河東二島新所
之野屋丸在東門一方之居以依源と
中主の講物原論命、九次役、一
成ら巧成候い、一、村、其、繼官内
内政新申務少補、謀書と徳自分と

飛肺ニ歲月蓄々老申は右書状持系
笑かひ候不_レ由ニ舟所申引也
く上獄門ニ行_レ變_レと_レ病死_ハ大敷_ク
巧事い_ハ其_レのハ重料_ニて_レ新_ハ糸
以_テ名_ハ不_レ淺_ク松_ニて_レ解_ル也
右_ニ返_テ可_クお_レ解_ル

六月

明和七寅年閏六月

玄_ノ子_ト十一月飛列大野郡_ニ言_ハ山
上河原所_ニ百姓_ト由_テ右_ノ門_ニ松_ノ松_トを_レ勾_テ引
氣_ハ賀_ハ正_ノ國_ノ所_ニ山_ニ裁_テ案_内い_ハこ_トハ
其_レ宿_ト十_ノ次_ノ席_ト人_ト相_テ書_ル
一_ノ年_ノ齡_ト廿_七八_ノ歳_トお_レ見_ル

- 一 出生江戸場所ニ元孫在茂、病死ハ
小左衛門ト申者ク將
- 一 申せい申肉面辨鼻筋通面長威方
色淺黒大辨さ北いたる生附
- 一 厚鬚月代建方
- 一 目申位眼中よりくおんハ
- 一 歯ニ両々に揃え古少一なる方

- 一 眉毛厚くたる方
- 一 耳帯辨
- 一 衣類衣類木綿蒲色袴之袴
下ニ色名お知細袴之木綿布子と
差一帯之振子名お知
- 右ノ通ノもの於有く名ニ其場所ニ
苗量沙料ハ所代友松殿ハ成之地頭也

中かまふり於江戸安後彈正少弼方
一申出外あり及見及つゆりて後哉可
中か外乞家来又主の亦も入云吟味
一是ゆり隠呈服よりお知ゆりて為
曲十事外

同六月

明和七年九月

之年外に

私領之者吟味之筋有之由代官
之代差是石捕外席是之領地取
通達之由之由之由之由之由之由
地取之筋外筋外有之式似後杯

紛爰後爲か来可波式の写の以来を
敵地取口爲通有之振ては波山
を隠密之を差是山節以亦通達
有之山を捕方之を差支之爲可
お成山少子代を差是山以後成を
お逢之重山振ては波山

九月

明和九辰年四月

尚辰二月四日武列 児玉郡

右結村之親勤十布之底爲有迹

玄山同人將友次市人相書

一 案武松之案年齢お意お見申

一 生國武列 児玉郡右結村之親勤十布

熱頰

一 伸せいふり肉

一 面筋丸く鼻の鼻筋通、痣瘰、口

一向無く、目立、柔、和、お見、色、白、方

一 唇薄く、色能、為、筋、齒、細、並、能、方

一 中、髪、月、代、年、以、お、懸

一 目、細、く、之、と、薄、ふ、ち、白、眼、待、成、方

一 眉毛厚、方

一 首筋猪首

一 耳常解

一 額、少、く、黒、河、さ、く、根、赤、底、之、有、く

一 衣類、濃、花、色、木、綿、布、子、裏、前、黄、木、綿

一 紋、所、之、く、下、若、赤、之、格子、湯、木、綿、袴

一 表、古、之、前、黄、袴、之、く、木、綿、帯、ハ

流花色をめん幅廣き方

右に通くまの有りとおろてハ、そ取こ
田舎湯料を比代官社領ハ地頭に出
支より於江戸松平對する方にて申出
若及見聞ハ、そ取申可申出ハ、
家来又者末と入念てそ吟味ハ、
服よりお知ハ、そ取申可申出

四月

安永之午年正月

近年村々は虚之傳修行之弊
系百姓之口禱よりケル爰儀中
或ハ旅宿を中舟の振村役人扱
中ハ灰宿元是此等を兼定之
山宿雜成由をアとせを場

居合のより其を尺八の歩擲段に
底舟の儀有り候お少不届く玉の
虚無僧修行段の志次才の施物を
請敷之入のてお對する一宿可段筋
此等以來虚無僧を御も不法之筋
有く志之村方と差押沙料ハ
此代宿并此段不段不私飲を飲之

地取段不に早く石連か届く若於
お肖をそ村方と為紙度也

右に越沙料私飲と社飲亦不淺振
お觸村に与写立村に入口高札場或
村役人之宅前標に為張置て申

正月

右に越一はお觸

安永三年十月

近年浪人杯と申村々百姓家には
合力を乞ふ少分々合力淺杯を以て
無口いさし或一宿を乞ふ病氣杯を
中に又口幾度違ふ小内ニ名取く
難額を中を合口淺杯汁杯より

此後粗お少不届く之以来右禰之
庄の荘裁ゆりて色色之様多洲人
為石捕園八列伊豆國甲斐國志
公事方此勘定奉行に上之也。余之
國々ハ沙料志此代官私殿志飲之
地取に石是て庄出に勿滞何程中ハ
変る不為波止宿苗字帯刀に公六

一 穢之合カ養波分浦ハ

一 旅僧修験暫女座取之類物貫之

之の志次才之報謝を清お對之

宿を借りて中交近年押之宿を元

或禰よりケ分爰儀中を小庄の

有之候粗お少是以来届く之ハ

以来右禰不法之庄のハ兼ケ條

同根為石捕石造ておひ若於お肯と
之村方て為哉度と也

右之経湯料私成と社成亦不淺根
お觸村之言為字元村之合之札場
或村役人之宅兼根之為強重之申

十月

右之通てお觸ひ

安永四未年六月

為之月八日秋夜母いち糸女房
ふしを切伏速をい渡列富士郡
菊参系村百姓と丸染門人相書

一年齡之十四又茶とおんひ

一出生夏列若沃初梅名村之元之在

- 病死いづゝの糸左束門と申者く將
- 一 申せい申内面胛鼻筋ハさく丸顔
- 色白柔和成方
- 一 申髪月代こきこ方
- 一 目細くくぼさ方
- 一 齒並様之古分りゝ急小方
- 一 眉毛細く短方

- 一 耳常袴
- 一 歩行ハ希々々ハ方
- 一 衣希々衣敷花色木綿布子紋不
之加い菱

右之通之者於有くたを新田並
 湯料者此代官松飯を飯之地段に
 中少吏より於に戸月昔町を引に可

中かひ若及見ゆゆくを候も下中かひ
を家来又、その未を入意て是吟味
若隠重候お知ゆりて為曲事

文月

安永六年二月

当二月六日之人羽列村山郡

平塚村平塚寺宿成切殺遊云

下男嘉右人相書

一年齡斗拾人衆

一出生平塚村三人在波病死云云

中者之将

一 申せい少云さく申肉面疥鼻筋通
疵瘡之記多有く色黒方

一 申髪月代濃方

一 眼久くすこ記方

一 歯並採唇厚方

一 耳片疥

一 之衣之衣類黒木綿古布子紋所

只知右布子之上は淺黄帷子也

总一帯黒木綿

右之廻之者於有之者之所ニ由る重

湯料者以代友私飲を飲之地記は

中少於江之産業系能光方中少は

若及見及少少く之候後中出外を

家来又之の未と入急可とを吟味し
若隠、重外にお知りて為曲事し

六月

安永六年八月

尚六月十日未挽所の町目孝之助
母いちとをノ殺逆をい石仕文之布

人相書

一年式拾之歳年来ふけい方お見え
一生國紙申國留山く者く由

一 申せいより少なるく瘦小方

一 平顔より色白少赤之有る顔骨小方

一 鼻小く鼻先之疤痕之有る

一 眼が狭まる思目うち成方

一 唇薄方より下唇赤白か齒細か採方

一 眉毛薄き方

一 月代濃く月代の内どけい不三々不有る

一 申髪より後下り小方

一 絨申之毛糸より年古よりや成方

一 毛長し衣類木綿絹かすり綿単物

一 毛し木綿色帯より一色をい

右より通くその於よりかを所より並材料ハ

此代官私儀志候之地頭は申出支より

於江戸曲園甲斐書若本は可申候

右人相之者及見及少かりて其後中か
を家来又之のホと入と云てを吟味し
隠重候よりお知りて為曲事なり

八月

安永七戌年九月

玄酉六月十日未挽所之町目犯之所
勤跡抱役者幸之助母と殺之稱る
波久之路の同人石佐文之市人相書とい
同年八月お筋の交今以不為出の
先達のお筋の人相書に通くとの

有之由之跡之由乃お政之跡
尚書曲剛甲斐守番下にてお在り

九月

右之通一書お筋也

天明之卯年十月

尚四月十二日越前加代守及殺害
逐去の羽列由狸部新庄村百姓
後右忠將重四市人相書

- 一年才口菜年終より年防お見也
- 一生國羽列由狸部新庄村百姓後重

熱頰

一 せいごう中肉面解九く鼻筋通顔色
悪方

一 目細目志り上り此方

一 眉毛毛落キ方

一 歯並様之古分り悪此方

一 髪厚月代落キ方

一 耳帯解

一 之篇之衣袂高其若程薄木綿

布子と云ふ一是木綿帯と云ふ也

右之通之者於多く是を不為重法料ハ

此代官私領者領之地取中中少丈方

於江戸阿部御中書方は可中か此若

及見少此く是候哉中出此を家来

又者亦入意之也味外隱重服之
お知りて為曲事也

十月

天明七年八月

如勘定奉行に

近頃日光浄門跡家来之申中
万石以上并御旗本屋敷未は之
偽かづりヶ所及儀中之改帳細
有之由相聞か且又日光

御宮 御新并御祈禱守之由中
不之に持系以者有之由以右所之者
有之以之先為是之守以之内以中
右之越不渡板在之不之之也
右所之者當之由以候中か以之捕方之
之の先是之に被吟味也

又月

天明七末年七月

以勘定奉行に

奉行取吟味引合未る在方之者候か
以是之先紙を江戸宿にお渡江戸宿
先掃を以村に候はお附右先紙の請
之の先飛肺候儀候於之不請元來以知

色以似也差紙を持系江戸宿飛袴
く由偽飛袴候様かより元由その
有之趣お少村々雜儀之事此依
以來ハもと不にお力て飛袴候儀不
差紙請外その江戸迄く上右差紙
元次外江戸宿に合致由当地候儀
てお渡右之趣を江戸宿を以て中渡
持系

下約之意

但令怪交差紙と云渡外右差紙
持系此者と云不為重之能可
訴外

右之雜湯料表此代友私願表飲之
此取与社飲を不渡極てお解

七月



博奕之部

明治元申年十月

之存行也

取退之令と号し之を博奕同然候
有之申右の如く停止之名案に
お筋の要今以不お止近頃を以社
業之儀又ハ取之儀と名存取退

吾等いづれも三年右為人をお願ひ分志
百捕ひ度は仕重中分は向後右神儀
有るゆへに武士の方ち社方所方在りて
是れ味為人志不及中改之家に
夫人細名之一所内く者た是之に立
増乘同統之結中分系常く心を
致し味疑及者有るお力てハ子く

一併おひ

右へ通寛保元酉年お願ひ九年久及
お成着て改忘却分程又解重ひ旨
急度でおちひ
右へ通てお解ひ

十月

寺領社領有之る社本不渡根村に
觸定小根之致小

右之趣お觸小百下迄均と之意小

之月

天明之卯年十月

之奉行也

大和國村之三与け人らととこる一箇
似寄小儀お企村之ととの致加入
様令後を其員一自農業も怠一統
固官筋之基とにお成迄おゆ小前小

与社本報之上云 仁年富之儀ハ格別
之外右辨不場成儀一切改訂及事
以可以來村役人等より巖爰改訂味
右辨之儀改訂者ハ勿論推乃ハ者
有之由之、其不之由ハ其由沙料
此代友以改訂不私儀之地位ハ不
之中ハ其由隱重ハ其由ハ其由曲事ハ

右之越、京大坂所存并伏見奈良
堺東行其外山城大和河内和泉播磨
大分國津和野ハ此代友以改訂新私領
領之地改訂之其由ハ其由ハ其由ハ

十一月

右之通之其由ハ其由ハ其由ハ

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is extremely faint and illegible.

Handwritten mark or characters, possibly a signature or initials.

